

政策を実現する手段としての生涯学習講座の在り方 ～父親向け講座の参加者を増やすための取組～



川島町教育委員会生涯学習課 神田 雅貴

1 問題の背景

本稿は、川島町教育委員会生涯学習課の男女共同参画に関する講座の実践事例をもとに、講座の参加率を向上させるための知見を提示するものである。

川島町では、男女共同参画に関する学習を、第4次生涯学習推進総合計画の主要施策の1つとして位置づけている。この男女共同参画という行政目標を実現するために、学習講座、パネル展示などの方法により、取組がなされている。当然のことだが、講座を実施すること自体が目的ではなく、学習を深めるための手段である。いわゆるP D C Aサイクルに置き換えると、講座の企画がP (plan)、講座の実施がD (do)、内容の評価がC (check)、次回の講座での改善がA (action)に該当する。そして、本稿を記述することは事例の紹介をするだけでなく、実践を丁寧自己評価すること¹⁾になり、事業改善に役立てたいという意味も含んでいる。

一方で、生涯学習は個人の意思に基づいて参加するものであり、魅力的な講座には参加者が多いが、その逆であれば参加者は少ない。同じ事業を実施するのであれば、一般的には参加者が多いほど事業効果は大きい²⁾。どのようにして参加者を増やすかは、行政目標を達成するという意味で重要なことである。

しかし、男女共同参画に関する講座は必ずしも個人のニーズに基づいて行われるものではなく、その必要性が理解されにくい面³⁾があり、参加者が少ない状況である。そのため、担当者としては、実績のある講師を探す、親しみやすい内容とする、気を引きそうなタイトルをつける、参加しやすい時間を設定するなど様々な方法を試行錯誤している。この

うち、参加者への募集方法については、直接参加者の数に影響を与えるものである。参加者の募集方法については、参考となる書籍⁴⁾もあるが募集チラシづくりをいかにするべきかという面に特化している傾向がある。講座を成功させるには、魅力的なプログラムと効果的な募集は、相互に関連していると考えられる。講座を成功させるためには、プログラム内容を魅力的にするとともに、効果的な募集方法をあわせて考える必要がある。

2 実践事例

今回紹介する実践事例は、生涯学習課により実施された平成22年度と24年度の父親向けの講座の3つの事例である。具体的には、事例1は、主催者側の見込みと参加者側のニーズがかみ合わず参加者の募集が失敗に終わった事例である。事例2は、開催場所や開催時期に課題があり改善は見られたものの全体的には成功したとは言えない事例である。事例3は、様々な工夫をすることで、参加者の募集に成功した事例である。

(事例1) 平成22年度「イクメン養成講座①父親のための読み聞かせ講座」

【目的】読み聞かせを通じて、男性の子育て参加意識を高める。

【学習目標】①父親による読み聞かせのメリットを知る。②読み聞かせのスキルを身につける。

【対象】小学校2年生以下の子どもを持つ父親など

【日時】平成22年11月13日(土)

【講座内容】男性が1対1又は少数で読み聞かせを

行う方法を紹介し、読み聞かせのスキルを高める。

【参加費】 無料

【募集方法】 保育園・幼稚園の全園児、小学校1・2年生全児童にチラシを配布。コミュニティーセンター・図書館・保健センター・幼稚園・保育園へポスターを掲示。町広報紙に募集記事を掲載。

【申込み方法】 電話・FAX・メール

【申込み者数】 6名（父親1名、プレパパ5名）

【参加者】 6名（父親1名、プレパパ5名）


事例1 募集チラシ

イクメン養成講座 第1回


「男性のための 読み聞かせ講座」

★「イクメン」を知っていますか？
「イクメン」とは、子育てに積極的に参加し、子育てを楽しみながら自分自身も成長しようとしている男性、または将来そのような人生を送りたいと考えている男性のことです。


★「仕事が忙しい」「きっかけがなかなか無い」お父さんに！
子育てにもっと参加したい！と思っても、「仕事が忙しい」「きっかけがなかなか無い」方のために、「イクメン養成講座」として、子育てにもっとかかわるためのお手伝いをします。
現在お子さんがいらっしゃるお父さんはもちろん、これから父親になる予定のかた（プレパパ）やおじいさまの参加も歓迎です！



第1回
男性のための
読み聞かせ講座
【11月13日】



第2回
親子デイキャンプ
【12月19日】
後日募集します



（※裏面の募集要項は紙面の都合で省略した）

本講座は、父親の読み聞かせを通じて、子育て参加を促すことを目的に開催された。川島町としては、初めての父親向けの講座であった。当時流行語でもあった「イクメン」という言葉を使って募集を行った。父親の参加負担を考えて、半日の日程とした。募集チラシは対象者全員に、約880枚のチラシを配布した。また、申込み方法もFAXとメールで24時間受付ができるように配慮した。しかし、結果的には申込者6名と厳しい結果になった。

参加者が少なかった要因は以下の点であると考えた。まず、父親の読み聞かせに関する取組は始まりつつある⁵⁾が、多くの父親は興味が湧かなかった

ことであった。次に、チラシの内容として、父親の読み聞かせが、子どもにとってどれだけ意味があるか伝えられなかったことであった。

このことから父親を講座に参加させるには、「父親のためになり、結果的に子どものためになる講座」よりも、「直接子どものためになる講座であり、結果的に参加した父親が学ぶ講座」にしたほうが、参加者の募集が成功すると考えた。

（事例2）平成22年度「イクメン養成講座②冬山で遊ぼう！親子デイキャンプ」

【目的】 父子で野外活動を行うことで、その楽しさを体験して、男性の子育て参加を促進する。

【学習目標】 ①ほかの父子の様子を見たり、ほかの父親の子育てに関する意見を知る。②寒い冬でも楽しめる野外活動があることを学ぶ。

【対象】 小学校2年生以下の子どもを持つ保護者

【日時】 平成22年12月19日（日）


【講座内容】 ①山遊び ②たき火 ③焼き芋づくり

【参加費】 【広報方法】 【申込み方法】 事例1と同じ

【申込み者数】 20名（父親8母親4子ども8）

【参加者】 11名（父親4母親2子ども5）

事例2 募集チラシ




イクメン養成講座②

冬山であそぼう！

～親子デイキャンプ～

IN 名栗 12月19日（日）



寒い×たき火

＝めっちゃ🎵しい！

～今年最後の思い出づくりをしよう～

（※裏面の募集要項は紙面の都合で省略した）

本講座は、親子の自然体験を通じて、子育て参加を促すことを目的に開催された。前回の講座の反省点を踏まえ、父親のための講座ではなく、親子で楽しめる講座とした。また、父子だけの参加は負担が大きいと考え、父親が参加すれば母親も参加できるようにした。

応募者は20名と増えたが、当日に子どもの体調不良により、9名が欠席してしまった。冬季の開催は子どもの体調を考慮すると避けるべきであった。本講座の主たる目的は子育て参加を促すことだが、参加者を集めることにウエイトを置き過ぎた点を反省した。

また、講座の中で参加者同士の子育てに関する話し合いの機会を設けた。その中で、「イクメンになるために参加しているのではなく、子どものために参加している」と話していた参加者がいた。流行語を使えば参加者が集まるのではないかと安易に考えたことを反省するとともに、参加者の立場に立った募集チラシの作成の必要性を痛感させられた。

（事例3）平成24年度「親子で荒川探検ツアー」

【目的】親子で自然体験活動を行うことで、男性の子育て参加を促進するとともに、子どもの自然への興味関心を深める。

【学習目標】子どもに自然体験をさせる意義やその楽しさを保護者が理解する。

【対象】小学校2年生以下の子どもを持つ保護者

【日時】平成24年6月30日（土）

平成24年7月8日（日）

【参加費】大人1,300円子ども700円

【講座内容】①秋ヶ瀬取水堰見学 ②川の博物館見学 ③川遊び体験 ④ハゼ釣り体験 ⑤砂浜遊び

【広報方法】保育園・幼稚園の全園児、小学校1・2年生全児童にチラシを配布。コミュニティーセンター・図書館・保健センター・幼稚園・保育園へポスターを掲示。町広報紙・ホームページに募集記事を掲載。

【申込み方法】電話・FAX・メール

【申込み者数】45名（父親16、母親6、子ども23）

【参加者】33名（親子）定員を超えたため、抽選で参加者決定した。

事例3 募集チラシ

参加者募集

男性の子育てを応援します

親子で荒川探検ツアー

川の始まりって、どうなっているの？
川の水の最後は、どうなるの？

日 時 6月30日（土）および7月8日（日）全2回

集合場所 川島町役場 7：30

内 容 1日目 荒川中流部で生き物の観察を行います。また、川の博物館でアドベンチャーシアターで川を下る疑似体験に挑戦します。
2日目 荒川の河口までバスで行き、海で浜遊び、河口でハゼ釣りをします。巨大風車や東京ゲートブリッジも見学します。

講 師 ○○○○（○○○）、○○○○（○○○）

持ち物 昼食・タオル・着替え・雨合羽など（詳しくは後日通知します）

主 催 川島町教育委員会 生涯学習課

募集期間 5月21日（月）～6月7日（木）

対 象 4歳から小学校2年生までの子どもと保護者（男性でも女性でも参加できます）※町内に在住、在園されているお子様とその保護者が対象となります

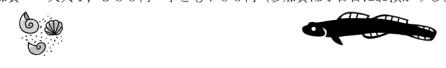
定 員 親子35名 ※定員を超えた場合は抽選とします。

申込み 6月7日（木）までに、下記までお申込みください。

①電話 ○○○-○○○○ ②メール ○○○@○○○○.○○

③FAX ○○○-○○○-○○○○

参加費 大人1,300円 子ども700円（参加費は1日目にお預かりします）



（※原本のチラシは文字が小さいため内容を損なわない程度に修正してある）

平成24年度は2年前の経験を踏まえて、以下の点に配慮して募集を行った。父親の子育てスキルを高める講座ではなく、親子で一緒に自然の中で遊びながら活動するという表現で募集を行った。同時に、参加対象者に父親という条件は加えなかったが、父親の参加を増やすために、川遊び等の男性向けの内容とした。また、前回、不評であった「イクメン」やそれに類するような言葉使わないようにした。さらに、荒川の上流から下流までを2回で体験学習できる内容とし、父親の参加負担に配慮するよりも活動内容の充実を優先させた。具体的には、埼玉県は海がないことを考慮して、運河のハゼ釣りや砂浜遊びを取り入れた。募集の方法はホーム

ページを追加した以外は、特に変更点はなかったが、45名（父親16名、母親6名、子ども23名）の親子から申込みがあった。父親と子どもの参加は13組（68.4%）、父親と母親と子どもの参加は3組（15.7%）、母親と子どもで申し込んだのは3組（15.7%）であった。男性の参加者を確保することは達成できた。

さらに、講座終了1か月後に行ったアンケートでは、子どもに関し、「普段とは違う集団の中でも、発言するなど積極性を感じた。」「社会の中でのわきまへの態度が身につけていることに気づきました。家の中では見えなかった姿でした。」など、普段とは違う環境で、ほかの家族と一緒に活動したことで、父親の子どもに対する理解が深まったと考えられる回答があった。

3 考察

参加者を募ることが難しい講座でも、募集方法と講座内容を工夫することで、参加者を確保できることが示唆された。具体的には、父親を参加させるために、父親にとって魅力的な内容とするのではなく、父親の「子どものために何かを学ばせたい、経験をさせたい」という気持ちをくみ取った募集方法・講

座内容とすることである。

さらに、「イクメン」などの流行語を募集時に使うよりも、内容を充実させることが参加者を増やす上で、効果があると考えられる。事例3のように、参加費の負担があるにもかかわらず、定員以上の申し込みがあったのは、ある程度負担があっても、より良い環境で子どもに学習させたいという保護者のニーズの表れだろう。このように、参加対象者の気持ちやニーズを的確に把握すること、男女共同参画という行政目標を、住民である参加者からみて魅力的に見えるように「変換」できる能力が我々職員には求められているように思う。生涯学習の現場は、このようにしなければいけないというマニュアル的なものはない。しかし、多くの参加者が集められる講座を実施するには、経験を重ね「コツ」や「カン」を育てていかななくてはならない。これは、職人のような世界だとも言えるかもしれない。本報告はあくまでも一事例であり、広い範囲での一般化はできないかもしれない。しかしながら、本稿をきっかけに現場実践者の参加者募集に関する議論が活発になり、「職人の技を磨く」一助になれば幸いである。

脚注

- 1 S・Bメリアム、堀薫夫ほか訳『質的調査法入門』ミネルヴァ書房、2004、p57
- 2 定員割れなど参加者が少ない講座を想定している。ワークショップなどの少ない参加者で内容を深める学習形態を否定するものではない。
- 3 「個人的な興味、関心、希望を充たすべく、教育・学習の機会を活用する場合には、個人的要求が中心となりがちであり、ともすれば、社会にとって必要な事への関心や対応が欠如しがちである。社会の存続を図るためには、社会に共通の課題に取り組む必要がある。しかし、それは、必ずしも個人の興味・関心に合致しないことが多いが、それへの取組を怠ると、社会的に様々な問題の発生につながるおそれが生ずる。」中央教育審議会生涯学習分科会「今後の生涯学習の振興方策について」、2004
- 4 牟田静香『人が集まる！行列ができる！講座、イベントの作り方』講談社プラスアルファ新書、2007
- 5 ファザーリングジャパンホームページ参照 (<http://www.fathering.jp/>)

参考資料

- ◎ 秋田喜代美・藤江康彦編『はじめての質的研究法 教育・学習編』東京図書株式会社、2007
- ◎ 「第4次川島町生涯学習推進総合計画」川島町、2010
- ◎ 神田雅貴「現場で働くなかで専門職として成長する」『社会教育』2012年4月号、p30-31